

平成21年度研究助成事業報告

平成21年度京友会研究助成対象者に対する助成期間は平成22年5月31日をもって終了した。6月30日までに、5名全員について報告書を受領した。希望者には報告要旨をコピーしてお渡しする。なお研究費に関する会計報告については、1人10万円の研究費の実施内訳及び領収書を受け取り、事務局で確認を行った。

平成21年度 京友会助成対象者

2009年6月4日 助成委員 皇 紀夫・西平 直

氏名	学年	助成の種類	講座	指導教員名	研究課題
広瀬 悠三	D1	研究	臨床教育学	矢野 智司	カントにおける地理教育の教育人間学的研究
田中 哲平	D1	国際研究集会	教育認知心理学	齊藤 智	The nature of retrieval processes in a reading period task : a recall timing analysis
栗田 季佳	M2	研究	教育認知心理学	楠見 孝	潜在的偏見の解消に及ぼす内的偏見抑制動機の効果
嶺本 和沙	D2	研究	こころの未来研究センター	吉川 左紀子	表情への順応が表情認識に及ぼす影響—順応からの回復に着目して—
工藤 瞳	M2	研究	比較教育政策学	杉本 均	ノンフォーマル教育からオルタナティブ教育へ—ペルーの働く子どもの学校に着目して—

平成22年度 京友会助成委員会選考結果

審査委員の小林哲郎先生と楠見孝先生により、京友会2010年度研究助成金の審査が行われた。応募は5件あり、審査の結果5件が採択された。審査においてはこれまでの研究成果や継続性を踏まえ、問題意識や研究計画が精査され、その妥当性や発展性から採択が決定された。

平成22年度 京友会助成対象者

2010年6月15日 助成委員 小林哲郎・楠見 孝

氏名	学年	助成の種類	講座	指導教員名	研究課題
久野 和子	D3	国際研究集会	生涯教育学	川崎良孝	「第三の場」としての学校図書館
谷田 勇樹	M2	国際研究集会	教育認知心理学	齊藤智	Effects of accent typicality and phonotactic frequency on nonword immediate serial recall performance in Japanese
白戸 健一	M2	研究	生涯教育学	佐藤卓巳	満州電信電話株式会社における放送文化政策の実践とその継承
中山 真孝	M2	研究	教育認知心理学	齊藤智	言語と行為の模倣における意味の役割について
富松 良介	M2	研究	心理臨床学	大山泰宏	虐待アセスメントとしての風景構成法に関する縦断的研究—3年後の再調査から捉えた子どもの心理的回復と描画上の変化の関連

平成21年度 同窓会国際賞の選考結果

国際賞の受賞対象となったNiels VAN STEENPAAL (ニルス・ファン・ステーンパール) 氏の論文は、歴史研究をする上での基本的方略を素地とし、また『官刻孝義録』をメディア論として考察する論点のユニークさが感じられる論文であり、国際賞にふさわしいものであった。

2010年5月14日 審査委員 皇 紀夫・西平 直

氏名	学年	論文題目
Niels VAN STEENPAAL	D1	『官刻孝義録』—幕府仁政のパフォーマンス—

60周年記念助成事業助成対象者コメント

助成を受けて

■ 久野 和子

この度は私の国際会議での研究発表に助成をいただき、ありがとうございました。心より感謝申し上げます。助成を受けたということで、これから自分の研究に自信と誇りをもって取り組んで参りたいと思っております。ありがとうございました。

私の研究は図書館情報学です。これから図書館についての研究を通して、人々の生涯学習や日常生活を支える図書館を陰から支えていきたいと思っています。高度情報化社会の中で、人々は家の中でテレビやコンピュータ、携帯電話などに孤独に向き合うことが多くなっています。そのような時代であるからこそ、人々が自由に集える情報の場、学習の場が必要であり、ますます社会的に求められていくと信じます。さらに学校では、学校図書館は第二の保健室とも呼ばれるようになってきており、学校における癒しの場、オアシスとしても機能しているところが多く見られます。私は学校図書館のそうした社会的機能について、オールデンバーグの「第三の場」という概念を援用しながら、その意義について研究していきたいと思っています。学校図書館が生徒たちの学習と学校生活を支え、より豊かな実りあるものできるように、様々な提言をしていきたいと考えています。これからもどうぞご支援とご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

■ 白戸 健一郎

指導教授・佐藤卓己先生から、京友会の助成事業の紹介を受けたのは今年の4月頃だったと思う。そのときはじめて、研究科の同窓会が大学院生への助成事業を行っていることを知った。私の京友会との関わりは教育学部入学直後の歓迎パーティや卒業式後の懇親会などのみだったので、今回の助成を受けて、同窓会が後輩を育成していこうとする意気、さらに、先輩方とのつながりの中で自分が研究を行ってきたことやいること、そして行っていくことが強く意識できた。

また、自分の研究内容や計画を整理し申請書として提出することも初めてであった。申請書を通して、自分の研究の弱みや足りない部分や方向性も見えてきて、自省の貴重な機会になったと思う。もちろん、採択されたことも素朴にうれしかった。

今後は戦前、中国東北部（満洲）で放送事業を実施していた満洲電信電話株式会社（1933年設立）を主な対象にして、その文化政策や対内及び対外宣伝活動を明らかにし、どのようにして総力戦体制の中に組み込まれ、どのような機能を果たしたのか、また、「満洲」全土の

放送を一元化する組織が出来上がったことで、それ以前の日本のメディア文化政策がどのように変容したか、さらに、その経験や知が戦後日本の放送秩序にどのように消化されたのかを研究したいと考えている。

「放送」という文字資料が残りにくい領域のため、活動実態に迫る際にしばしば困難さを感じるが、内部資料や年鑑、同時代の新聞や雑誌記事に眼を通し、修士論文作成に向けて研究を進めたいと思っている。

末筆ながら、今回、研究助成をしてくださった京友会には心から感謝いたします。

■ 富松 良介

私は、虐待を受けた子どもの心理療法（カウンセリングやプレイセラピー）に携わっており、特に風景の絵を描いてもらうことを通して子どもの心の状態を理解しようとする、「風景構成法」と呼ばれる心理アセスメントを、その実践と研究の中心に据えてきた。そして、本学教育学部の 2007 年度卒業論文では、児童養護施設に入所する虐待を受けた子どもの「風景構成法」について横断的な収集調査を行い、その固有の描画特徴を抽出した。

このたびの研究は、虐待を受けた子どもの「風景構成法」について、予後の縦断的な調査を行うものである。過去に調査を行った子どもにつき「風景構成法」の追跡調査を行うことで、心の発達や回復に伴って絵の構造や内容がいかに変化するか、それも虐待を受けた子どもとそれ以外の子どものあいだに違いがあるか、といった点について明らかにしたい。そして、この研究を通して「虐待アセスメント」としての風景構成法の機能をより向上させ、子どもの生活支援や心理的支援に活かしたいと思っている。

こうした縦断的研究は、通常の横断的調査に比して多大な時間と労力を要するものだが、このたび幸いにも助成を賜れることになり、研究活動に一層の励みと後押しを頂いた思いである。この幸運に感謝し、研究に邁進したい。

■ 谷田 勇樹

この度は研究助成金申請を採用していただきありがとうございます。今回の助成金は国際学会 INTERSPEECH2010 の経費にあてさせていただきます。国際学会の参加費は高額で、ご援助なしには参加できませんでした。特に今回の学会参加は私にとって非常に有益なものになると期待しています。なぜなら工学や言語学など、様々な学問領域の研究者が参加する学会だからです。

ここで私の研究をご紹介します。私の研究は言語に関わるものです。私たちは言語を苦もなく扱えます。しかし言語を扱うためには膨大な知識が必要です。文法規則、意味、そしてある意味を表す単語がどのような音並びであるかなどの知識がなくては言語を扱

えません。認知心理学ではこれら言語に関する様々な知識が記憶として形成され、それを利用することで言語活動を営むと考えます。そしてこれまで、様々な言語知識が形成・利用されていることが心理学実験で報告されています。たとえばそのひとつに音素配列規則に関する知識があります。「ウタロキダ」という音並びと「ズジスワフ」という音並びがあるとします。どちらも単語にならない音の並びです。どちらの方が覚えやすいでしょうか？おそらく前者の方が覚えやすいと思います。なぜなら前者は日本語によく出てくる音並びを組み合わせで作った配列ですが、後者はそうではないからです。つまり日本語話者は日本語の音並び規則を知識として持っており、それが覚えやすさに影響を及ぼすということです。この知識を持っている他の証拠として、初めてきいた外国語単語についても「日本語ではない」と判断できます。これも日本語の音並び規則を知識として持っているからです。そして知識に沿う音並びほど覚えやすいという事実は言語学習に重要なことです。なぜなら新しい単語の学習時は、当人はその単語を知らないためその時点では「単語にならない音並び」となります。そして学習にとって「覚えやすい」ことはアドバンテージとなります。ゆえにこのように、覚えやすさに影響を与える言語知識について研究することは重要となります。

我々のグループはこのような影響を持つ言語知識を新たに発見しました。これまでは知られていなかったものです。ただし新たな発見をしたとき、その存在を入念に確認しなければなりません。そのため言語学や工学など、様々な分野の言語研究者と触れ合える本学会に参加し、意見をいただく意義は大変大きくなります。そこでいただいた意見を参考に議論をつめていきたいと考えています。このような機会を与えて下さった京友会の皆様に大変感謝しています。

■ 中山 真孝

このたび京友会の研究助成を受けさせていただくことになりました、教育認知心理学講座の中山です。私の研究テーマは真似る力、模倣能力についてです。誰かの行為を見て、それを模倣して自分も同じ行為を行う、あるいは、誰かが言った言葉を聞いて、それを模倣して自分も同じ言葉を言う。この一見単純な能力は、道具の使い方や言葉（言語）など様々な技能を習得するのに重要な役割を果たし、私たちの学びを支えているといえます。さらにそれだけにとどまらず、相手を真似てみるというのは相手を理解するのにも役立ちます。相手のしていることと同じことをとりあえずしてみる、相手の言葉を繰り返して反芻してみる。そうしてやることで「ああそうか」と体験的にわかったという経験はあると思います。

ここで重要なのは、行為にしる言葉にしる、ただ単に動きや音を単に真似してみるというだけのことから、その奥にある行為や言葉の意味を理解することを促し、それによって目の前の相手を理解し、あるいはその積み重ねで技能を習得することができるということだと思います。また逆に、行為や言葉の意味を理解することがなければ模倣をすることは非常に難

しくなります。ここで模倣が難しいというのは、形式的に動きや音を真似てもそれは真の模倣とはいえないということではなく、それ以前に、ある程度の意味の理解による支えがなければ形式的に真似することすらままならないということです。私が今回の助成で研究しようとしているのは、この「意味に支えられた模倣」についてです。これについて実験心理学的な方法を用いて検討していきたいと思っています。

ところで、これまで行為の模倣も言語の模倣も模倣としてひとくくりにしてきましたが、実は心理学の分野ではそれぞれ別の分野として研究されてきました。しかし、既に述べたように模倣として同じものとみなせるのではないかというのが私の着眼点であり、実際それぞれの分野で「意味に支えられた模倣」についての証拠が見つかってきています。これらをもとに、言語と行為の模倣を同じ枠組みの中で研究し、共通性を探っていきたいと思っています。

すでに研究の一部を始めていますが、言語と行為の模倣の共通性が見えてくるとともに、相違点らしきものも見えてきています。この先どうなるかわかりませんが、共通点を探ることと相違点を探ることは表裏一体であり、違うと思われていたものが本質的には同じだった、同じと思われていたものから重要な違いを見出した、というのは研究の醍醐味ではないかという思いをもって研究を進めております。

最後になりましたが、今回の助成に感謝するとともに、それにふさわしい研究をする決意でもって締めくくりたいと思います。

「世界平和と日本人の真情—順霊の綴織工芸家遠藤虚籟の生涯と思想—」

京都大学名誉教授 和田 修二先生

ここでお話し申しあげるのは、大変主観的個人的な思い出であり、いささか乱暴ですが、しばらくご容赦いただきたいと思います。

私の生の原点は、何といたっても旧制中学1年で味わった日本の敗戦体験でございます。この夏を境に物事の意味と価値は全く逆転したという体験は実に強烈で、今でも忘れることができません。私は終戦後の混乱の中で世間の裏を多少とも見てしまいましたから、ニヒリズムから抜けられず、学生時代は、折角この教育学部に入れてもらっても力が入らず、その後も長い間、教育学の周りをうろついていたという状態でございます。幸いにオランダに留学することができ、そこで全く新しい体験をいたしまして、やはり教育学というのは大変大切な仕事だと思い、教育学部に帰ってくるのができたわけでございます。

本日、ここでお話する綴織工芸家、遠藤虚籟という人に出会ったのも、私の堂々巡りの中の出来事であったとご理解いただきたいと思います。遠藤虚籟(本名順治)は、明治23(1890)年に山形県の鶴岡の近在の村で生まれ、旧制の庄内中学校に入りましたが、16歳の時に画家を志して中学を退学しております。そして、上京して苦学しながら洋画を学んだのですが過労で目を悪くし画家を断念します。この挫折がもとで彼は当時の新宗教の一つの「神生教壇」に入信して伝道活動をするという生活をし、陸奥四百里を一人で巡礼するなど様々な職業的、思想的な遍歴をいたしまして、34歳で綴織作家になった人です。作家としては大変スタートが遅いですが、戦前の帝展、文展で次々に華麗な綴織壁掛けの大作を発表し、そのまま美術界に残れば、戦後の大家としての名声を極めた人であったと思いますが、ちょうど日本が全面的な戦時体制に入り、綴織を含む贅沢品の製造と販売が禁止された昭和15年、彼だけは芸術保存という意味で綴織をすることが許されるのですが、真面目な彼は、「皆が戦いに行つて色々な所で不幸が起っているのに自分だけどうして綴織をするのか」ということで悩みます。そして、第二次世界大戦の戦争犠牲者の霊、しかも敵味方や人間家畜を問わない死者全てを弔い、恒久的な世界平和を祈るために、綴織曼陀羅を作りあげようと発心するのです。その後は、美術界から身をひいて、ひたすら曼陀羅を織り続けて、昭和38(1963)年に清貧の中に74歳で亡くなった。これが彼の人生の概略です。

私はその虚籟さんとは、大学院生の時から面識がございました。しかし当時は彼は大変なことをしているという気持ちはございましたが、戦前は非常に華やかな活動をしていたのに、戦後は田舎で食うや食わずで、コツコツやって、しかも作品は完成に3年、5年とかかるわけですから、正直なところ何をして

いるのだろうと気の毒に思っていました。すでに東西の冷戦が始まり日本国中が二つに分かれいがみ合っていた状態ですから、その中でただ死者を弔って平和を祈るために仏像を織っているというのは、あまりにも反時代的でセンチメンタルだと感じましたし、世間もそう思ったのではないのでしょうか。そんな私が虚籟に関心を持ちまして、彼の志と作品の存在をぜひ世に知らせたいと思ったのは、それから随分経った後、虚籟が戦時中疎開して綴織を織っていた鶴岡の丸岡の村人が虚籟を偲んで糸塚を建てたというニュースを知ったのが契機でした。また、そうした虚籟の再発見には、私自身のこの間の精神的な遍歴と曲折がありました。

一つは、1960年代の初めにオランダで勉強をし、日本の知識人は、あまりに文化の違いというものに対して無頓着であり、それが自分の国の文化と歴史を知らないということとペアになっていることを痛感したことでございます。近代化の動力になりました近代合理主義のものの見方と考え方は、西洋人のキリスト教の伝統と、ポリス的な公共性を重んじた生活の習慣から切り離して、進めていくと最後はニヒリズムになり、強いものの力による支配が出てくるという危険性を持っていたと言えます。しかし私達の近代化は、初めから近代化の美味しいところだけを取り入れて、近代化の本質や限界、その裏にある西洋文化との対決の姿勢は、希薄だったのではないかと思います。その点で私も含め戦後日本の言論思想界を指導した知識人と教育関係者の責任は小さくないと思っています。

私が最初に受けた戦後教育は、我々の内なる前近代的な、封建的なものをまず排除しようというものでした。私はこうした自国の過去に対し、全面的に否定的な教育が、その後の自分の国の歴史と文化に対しては無関心で冷淡である反面、外来の権威には極めて弱い知識人を作ったとっております。それでも戦後の日本が急速に復興し発展したのは、その陰で戦前の伝統的なメンタリティーを引き継いで、献身的に働くことを厭わなかった多数の古い世代の人たちがバランスとして存在していたからではないかと思います。しかし、高度経済成長以後の未曾有の豊かで便利な生活とともに、彼らが第一線から去ってしまい、冷戦体制が崩壊して国際社会が多極化してから、一気に各界の不祥事とともに戦後日本のエリート層の無気力と無責任、無定見が露呈してきたのが、今日の日本の迷走だと思うのです。

私自身の第2の大きな経験は、1980年代の初めにアメリカに行き、初めてそこで、いわゆる現代科学のパラダイム変化、ニューエージサイエンスに出会ったことです。そしてこの宇宙は「全体でもあれば、部分でもある、それ自体が自己矛盾的な実在」、ケストラーのいう「ホロン」が連なって出来上がり、全体として開かれたシステムとして絶えず進化しているというのが現代科学の世界像だということを知りました。人間の自由や主体性を大切にしなければならな

い教育は、近代科学の機械論的決定論的な世界観がはばかっている間は、どうしてもそこであらうてしまいます。従って、科学自身が変ったというのは、私には大変嬉しく、また、これで日本人の精神的な再生ができるのではないかと思いました。と申しますのは、「すべてが連なって、絶えず動いていく」という考え方は、我々には、それほど奇異なものではなく、既に我々の中にあるからです。さらに、ニューエイジサイエンスというのはサイエンスだけの革命ではなく、1960年代末から70年代にかけて世界的に高揚した反体制運動の裏で始まっていた新しい思考と社会変革の動きと併行していたのだということを知りました。我が国でも激しかった学生の反乱が一体何であったのか、我が国では既成の権威や秩序の破壊ばかりが突出したまま終ってしまった観があるが、本当はあの時、一つの正しい思想や一つの政治体制による社会の変革や平和の実現ではなく、多様なもの異質なものと「共生」を目指して、しかも各自が育った歴史と文化を自覚した自生的な変革の運動が、新しい時代の胎動として始まっていたのではないか。これは私にとって大きな発見であり希望でした。虚籟の糸塚のことを知ったのは丁度その時だったのです。

糸塚のニュースは、私をハッとさせ、感動させました。私は、これまで国家国民としての独自の理想を失って漂流しているように見えるこの国と知識人の在り方に大きな危惧を抱いていたのですが、ここには、確かに借り物でない人々の自発的な理想と行動、祈りと希望があると感じたのです。私は、これを転機に、虚籟の作品の所在を訪ね、残した手記を調べてみました。そして虚籟は、私が最初考えたような時代離れした感傷的な理想主義者では決してなく、むしろ戦争の責任を直視し、人類の和解と恒久的な世界平和を実現するための平和の哲学を求めていた、ポストモダンの共生きを先取りした人だったのではないかと改めて思いました。

特に私が感心したのは、曼荼羅謹作に先立って、虚籟が自分の体験と思索に基づく独自の共生の思想を30歳ぐらいまでに作っていたということです。彼は、中学を途中で辞めてしまったので学歴とも哲学とも関係がなく、全くの普通の日本人です。その彼が自分の思想を宇宙人主義と呼んでこう言っているのです。「人は皆、自分で考えることと信ずることができる。人は皆色々だから、思想と信仰は自由であるし、多様であって構わない。この思想を、もし皆が譲らなくて突っ張れば、それは闘争が起こるであろう。しかし思想や信仰というものは闘争しなくても済むのだ」と。当時のインテリの学生達、書物を通して西洋の影響を受けてきた人々は、厳しい現実にあぶつかると、文学や宗教にいく人々と変革を求めて社会主義にいく人々とに分かれるのですが、虚籟は最初から貧乏生活をしながら必死で働いていたものですから、そのようにクリアに物事を分けることができなかつたのだと思います。彼の思想は混沌の中で生きながら、それでも、真つ当に生きるにはどうしたらいいかということを実際に考え

た結論だと思うのです。

では、彼が思想は闘争しなくても済むということは、どういうことでしょうか。例えば、われわれが街に出てマーケットに行く、みんな一人ずつ考えが違うのに、喧嘩せずにものを売ったり買ったりしている。彼はそれは度量衡があるからだというのです。度量衡があるから、それぞれ違った考えであってうまく交流している。思想も同じで、思想を測る基準の度量衡に当たるような人間の原理を見つけ、それを当てはめて皆が動けば、思想の違いは、むしろ補うことができ、必ずしも対立して、闘争しなくて済むはずだと彼は考えたわけです。

そして、思想の尺度になるような原理を自分の経験に基づいて考え、さらに優れた先人たちから学ぶというやり方で、お医者さんが肉体を解剖して知るように、人生を解剖したらいいと考えたのです。そしてその結果、三つの基本認識に至ります。一つは、人間というのは五尺の肉体と 50 年の寿命を持っている有限な存在であるが、同時に内に神の声を聞くことのできる、自己超越的な霊的な存在であるということ。二つ目に、時間的にわれわれは無限の過去と、無限の未来との真ん中におり、空間的にも家族、社会、国家と無限に広がるものと、無限に小さいものとの間に生きているということ。三つ目は、世界にあるものは全て全体と個物の関係を持っていて、大宇宙を作っていると同時に、一つ一つがまた一つの小宇宙を作っている。そして、人間も人間生活も、思想も全部、全体と個物の関係で考えることができるということです。虚籟はこうした人間観察の三つの基本認識を、度量衡にも秤と物差しと升があるのに擬えて、人間存在の内外観と「秤」の原理、縦横観と「物差し」の原理、全個観と「升」の原理といい、この三原理に基づく日常生活の不断の反省と実行、つまり、宇宙的な存在にまで拡大深化された「我」の自覚に基づいて、自分の存在がいかに有難いものであるか、いかに自分の責任が重いかということを実感して生きる生活が本当の人間の生き方だと考えたのです。それを彼は「宇宙人」と言い、我々みな宇宙人の自覚に到達するということが大切なことで、それが歴史の意味ではないかと考えたのです。

虚籟は、若くして宗教活動に入りましたので、人生は己の内であって、いつも己を超えていく「霊」に従って生きるべきだという人生観を持っていましたから、人の一生というのは「順霊」の旅だと。その順霊の旅の途中で彼は京都の友達から綴織の手解きを受けます。綴織は大変辛気くさい仕事でありまして、下絵を見ながら一本一本色糸を爪で搔き寄せて織っていくわけですから毎日毎日の積み上げが大切です。この普通の人には億劫な、自分の理想である図案に従って毎日少しも休まずに綴織っていく仕事が、彼の宇宙人主義思想に合っていたのです。その後作家となった虚籟が先に述べたような経緯で戦時中鶴岡に疎開し、食うや食わずで、村人に助けってもらいながら曼茶羅を織っていた時、

彼は一つの願いを書き残していました。それは、「私はいま、世界平和を祈って綴織の曼陀羅を一生懸命に織っている。この曼陀羅を織る絹糸は、仏像になったものは、みんなに拝まれるであろう。しかしこの曼陀羅を織るときには、どうしても端糸が出てしまう。端糸になった絹糸は同じ絹糸でも人は顧みない。だからいつの日か、このくず糸を弔う塚をつくって欲しい。そうしてこれを日本人の至情を後世に伝え、また恒久的な世界平和を祈願する発祥地にしてもらいたい」というものでした。それを村人たちが覚えており、彼の没後 25 年に糸塚を作ったのでした。

私がこのいきさつを知って大変感動したのは、一つにはこうした時代を先駆けて生きた虚籟も、虚籟の心を素直に受け取って行動した村人も、学歴というものと関係がない人だったことです。それは、学歴なぞなくても、さらに、恒久的な世界平和は敵味方の区別なく、犠牲になったものの死を共に悲しむ心の上にはしか作れないという虚籟の信念と、村人たちの陰になって働くものへの同情と畏敬こそ私は日本人の真情であり平和思想の原点ではないかと思ったからです。ピカソの『ゲルニカ』はナチスに対する抗議と戦争の悲惨を訴えましたが、私は、人類の和解と恒久的な世界平和を祈願して綴織曼陀羅を織った虚籟の方に、日本人としてより深い感動を覚えます。なぜなら戦争に対する深く徹底した反省と、恒久的な世界平和に対する確たる展望と信念がなければ、私は、いかに戦争の悲惨と反戦を説いても戦争の再発を防ぐことは難しく、平和はいつも一時的、暫定的なものにとどまらざるを得ないと思うからです。私どもは戦後、平和国家の建設を目指して出発し、平和教育を行ってきたはずですが、そこに明確な平和の哲学があったのでしょうか、戦争の悲惨と反戦のレベル以上には出ていなかったのではないかと。虚籟は、敵味方を超えた全てのものが共に生きる「共生」を可能にするものでなければ真に恒久的な世界の平和というものとは得られないと考えていました。我々の代わりに日陰になっている人ともものに対する感謝と配慮を絶えず持ち続けることこそが平和を守り戦争を防ぐ道なのです。これが私は虚籟の心であり、その表のすがたが、全てのものがそれぞれ所を与えられることを示した曼陀羅で、その裏のすがたが隠れたものに対する敬意と配慮を表す糸塚だったのではないかと思います。

虚籟の主張は一見単純であります。その底には深い一つの哲学が含まれていると思います。共生という発想は、決して単発的な思い付きではなく、敵味方を超えて死者を悼み、絶えず陰になって支えているものものことを考えて生きるという人生観を持っていなければ出て来ないことです。そしてその裏には、更に全てこの世の中にあるものは全く無用で無意味なものはなく、全てのものは絶えず変わり、お互いに連なって見えないところで支え合っているという世界観がなければ出てきません。私は、学歴とは無縁であった虚籟が自分でのような哲学を持ち、さらにそれを生涯かけて実行をしたことに驚くと同時に、

思想や教育に従事したものとして、恥ずかしさを禁じ得ないのであります。

戦後多くの知識人や教師たちは、古い日本は滅びて新しい日本が生まれるのだと教えました。虚籟は逆に日本が敗戦によって本来の日本の姿に戻ったのだ、自分はそのことを、死んだ人のかわりに世界に伝えなければいけないと考えて、日本人には日本人の平和の思想があることを、綴織曼荼羅を織り続けることによって世界に示し、実証しようとしたのです。私は、我々教育関係者が、この虚籟の気概と志をもっと早く共有することができたら、今日の日本はもっと変わった日本になっていたかもしれないと思います。だが、今からでも遅くはない。我々教育関係者が国家理想というものを、もう一度各々が自ら考え、はっきりと言う責任があると思うのです。我々は、少なくとも私は、この間それをしませんでした。率直に言って、一步踏み出したら面倒が起こることを怖れたからであります。私の中にも保身があったのです。しかし、考えてみたら、それが全ての腐敗のもとではありませんか。

現在わが国では、非行に走る、あるいは勉学や労働の意欲のない青少年の増加が大きな社会問題になっております。そしてその原因を社会的な格差に求める議論が盛んでございます。しかし私は本当の問題は、彼らが自分にも、この国にも希望がないと思っていること、現在を苦しんでいるだけではない、過去と未来に対する展望と積極的な関係を失っていることだと思います。今を生き抜く希望と勇気を支えるのは、過去に向かって大切に守るべきもの思い出を持つことと未来に向かってぜひ自分が成したいと思う課題の自覚をもつことであって、それがある人間だけが、どのような苦難にも耐えて立ち上っていくのではないか。それを日常生活を通して若い世代に教えるのが大人世代の責任であると思います。少し青くさいことを申しましたが、私は今こそ本当に過去に学び、未来に向かって何が大切だと思うかを、我々が自分の言葉で語らなければならないのではないか、そしてそれに向って踏み出したら、抵抗をはねのけて言い続ける勇気と努力が必要なのではないかと思うのです。我々が己の内なる保身をすてる気になれば、我々には自分でも信じられないほど大きな仕事をする力がある。虚籟の生涯と作品は私たちに、その希望と勇気を与えてくれると思うのです。

短い時間にいろいろ乱暴なことを申しましたが、私自身が今、反省して思っていることだとお取りいただきまして、お聞き苦しいところがあったらどうぞお許し願いたいと思います。最後に、心からこの教育学部と、教育学部同窓会のご発展をお祈りいたして、私の話を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。